2024_1006「片瀬東浜の軽石（写真）」日々の理科 3713 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

江の島は現在「弁天橋（人道橋）」と「江の島大橋（自動車道）」で、陸側と繋がれています。しかし、橋を除けば干潮時でもほぼ陸側と分離されているので、文字通り「島」です。しかし江の島そのものにはほとんど砂浜はなく、遊泳できる場所は一か所もありません。

砂浜があるのは、江の島の対岸の陸側です。この陸側は、江の島との対岸に河口がある「境川」をはさんで、鎌倉側が「片瀬東浜」、茅ヶ崎側が「片瀬西浜」と呼ばれています。新江の島水族館があるのは「片瀬西浜」のほうです。どちらも夏は海水浴場になり、仮設の「海の家」がたくさん立ち並びます。片瀬西浜は外洋（相模湾）に面していますが、片瀬東浜のほうは、東を「小動岬（こゆるぎみさき）」や腰越漁港の防波堤、南を江の島や湘南港の防波堤に囲まれ、「ゆるい湾」の地形になっています。こういう海岸には漂流物が入りやすく、一旦入り込むとなかなか外洋に排出されません。それは「軽石」も例外ではありません。

「福徳岡ノ場」の軽石も「硫黄島」の軽石も、一時期のように日本の海岸のどこでも普通に見つかる時期は過ぎました。台風などの荒天で海が荒れた時などに自然に流れ去り、次第に姿を消しているのです。しかし、片瀬東浜にはまだ軽石が残っていました。汀線の奥の、大潮満潮時の波打ち際には、ゴミや漂着物のラインがあるのが普通です。軽石はそのラインの中に発見できます。この日も 10 分ほど歩いただけで 30 個ほど発見でき、何個か採取してきました。すべて硫黄島由来のものでした。しかし、数か月前に茅ヶ崎海岸で採取したような、エボシガイやコケムシが付着したものは少なく、すでに海洋を漂流している軽石は、漂着や水没によってほぼ姿を消したと考えられます。

（2024 年 10 月上旬／神奈川県藤沢市片瀬東浜）